

『原三溪翁伝』第3篇第2章を読み進めました

10月の定例研究会では、『原三溪翁伝』の輪読を進めました。

◆輪読

発表者：稲毛かね子

範囲：pp.696～731

第3篇 性格と趣味

第2章 趣味

第9節 茶道

第10節 劇と歌謡



茶道は、抹茶を飲み楽しむ事に様々な文化が加わります。茶室、庭の空間、茶道具、茶会の懐石料理や和菓子、客人をもてなす点前作法が融合した総合芸術です。三溪翁は茶趣味としてそれら精神の奥義を充分把握していました。翁は、親交深かった益田鈍翁の勧めで茶道を始めましたが、幼少の頃より漢学を学び、高経や習字、書画、歴史、詩作、詩画等の教育を受けており、その経験は豊かな見識を極め、三溪翁にとっての茶道は格好の楽しみとなったのではないかと思います。（稲毛かね子）

◆特別研究会

発表者：藤嶋俊會

テーマ：三溪先生の絵画鑑賞—『三溪帖』草稿に見る三溪の絵画の見方



渡辺崋山 《鷹見泉石像》
東京国立博物館所蔵 国宝

原三溪は渡辺崋山の「鷹見泉石像」を、徳川三百年はもちろん明治大正の今日までこれを凌ぐ絵画は出ていないと断言するほど高く評価しています。三溪はなぜこの絵をそれほど高く評価したのでしょうか。

それは崋山を尊敬する三溪だから当然ですが、それだけでなく西洋絵画の明暗法を取り入れた顔の表現と、従来の線の技法で描いた衣装の部分との違和感のない調和に、対象の真髓に迫る崋山の卓越した画技と精神を見たのです。それと同時に西洋の知識を積極的に取り入れて日本の進むべき道を考えようとした先駆者としての崋山の眼を見たのだと思います。その精神は、三溪が支援した院展の若い画家たちの作品にも受け継がれていったといってよいでしょう。（藤嶋俊會）